

2022 年 1 月 30 日

2021 年度聖路加国際大学大学院看護学研究科  
修士論文研究

不登校の子どもをもつ母親にとっての  
精神科訪問看護を利用する体験

Experiences of Mothers with a School Refusal Child Who Uses  
Psychiatric Home Visit Nursing

20MN019

高橋 妙理

## 要旨

【目的】本研究は、不登校の子どもをもつ母親にとって子どもが精神科訪問看護を利用する体験のプロセスを記述することを目的とした。

【方法】本研究は、不登校の子どもをもつ母親にとって子どもが精神科訪問看護を利用する体験のプロセスを帰納的に分析し、抽出した概念間の関連を記述するためグラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた。精神医学的診断を有し精神科訪問看護を利用している子ども、かつ、訪問看護利用開始時に不登校状態であった子どもをもつ母親を研究対象者(以下、対象者)とした。対象者に半構造化インタビューを行い、得られたデータを分析対象とした。継続的比較分析を用いて、「母親の体験」に焦点を当てコード化し、類似性や差異性を絶えず比較してサブカテゴリーを生成した。サブカテゴリー間の関係性を検討し、カテゴリー及びコアカテゴリーを抽出し、最後にそれらの関係を概念図に示した。なお、本研究は聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承認(承認番号:21-A012)と研究協力施設及び対象者の同意を得て実施した。

【結果】2施設から研究協力の同意を得て、5名の対象者にインタビューを実施した。得られたデータを分析した結果、1個のコアカテゴリー、9個のカテゴリー、34個のサブカテゴリーが抽出された。対象者にとって、子どもが精神科訪問看護を利用する体験のプロセスの中核は「母子ともに支援者に支えられることを通して希望をもつ根拠を得る」であった。支援者が【子どもを尊重し関心を寄せて子どもとの関係性を育んでくれると感じる】こと、さらに、対象者自身が【試行錯誤につきあい共に歩んでくれる支援者に支えられる】ことを通して、①【母子ともに信頼できる支援者への安心感をもつ】、②【子どもの変化への実感を得る】、③【子育てへの信頼が培われる】体験をしていた。それらの3つの体験が相互に作用することによって、希望をもつ根拠を得る体験が蓄積され、【不確かさの中で見通しをもち子どもとともに今を生きる】ことに開かれていた。

【結論】対象者にとって、子どもが精神科訪問看護を利用する体験は、支援者に母子ともに支えられることを通して、養育困難な状況の中で自分の力を発揮することが難しい状態にある対象者の養育レジリエンスが促進される体験であり、それは同時に、リカバリーのプロセスの一部であると考えられた。支援者は、母親の養育レジリエンスを促進し、リカバリーの過程を歩むことを支えるために、母親をねぎらい養育に関する不安や疑問に応じること、子どもが頑張っていることや工夫していることを対象者と共有すること、対象者の養育への取り組み方や子どもの理解に関する変化をフィードバックすることの重要性が示唆された。